

2人は同時に組みつくつと、床に転がった。

最初はシックスナインだ。

「ふふっ、イケメン少年のチンポ、楽しみね💖」

リノアがブリッジの股間に跨がり、顔を埋める。ブリッジもリノアの太ももを掴み、彼女のオマンコに舌を這わせた。

「はあっ💖お互いの・・・チンポとマンコを💖舐め回すなんて・・・はしたない💖・・・って・・・チンポデッカ！あんっ💖！」

「すっげー！お姉ちゃん、もう、濡れ濡れじゃん💖オマンコ、ベチョヌルでヤらしいね💖・・・うほおアナルもムツチャ綺麗💖・・・いただきます💖す💖レロンレロレロレロ💖」



リノアの赤い舌が、ブリッジの巨大な肉棒を根元から先端まで丁寧に這う。ブリッジのデカチンは、俺より年下のくせに俺の倍以上はあろうかという太さと長さだ。血管が浮き、亀頭がパンパンに膨張している。対してリノアのマンコは、すでに愛液を滴らせ、ブリッジの舌がクリトリスを執拗に転がすたび、彼女の巨尻がビクビク震えた。

「くっっ♡お姉ちゃんオマンコ♡美味しい♡ちゅっ♡れ

ろっ♥じゅゆるるっ♥！」

ブリッジの舌技は神業だ。

（くう！この子、年下のくせに・・・上手う♥それ

に・・・オチンチン・・・凄くおっきい（♥）

リノアの口内では、デカチンが喉奥まで突き刺さり、彼女の頬が膨らむ。俺は2人の脇で拳を握りしめていた。嫉妬が胸を焼く。しかし俺の包茎チンポは情けなく疼く。既に包茎の先端から、透明な我慢汁が溢れ始めていた。

開始から数分後、リノアの喘ぎが大きくなった。

「あっ♥ああっ♥！ブリッジの・・・舌、すごい♥じよ、上手うう♥！イツちゃう♥！舌で中をかき回されながらクリちゃんイジられて・・・イック♥」

「レロレロレロ♥」真剣なエロ顔でオマンコを執拗に責めまくってくるブリッジの責めにリノアの体が弓なりに反り、1回目の絶頂を迎えた。

マンコから潮が吹き出し、ブリッジの顔を濡らす。しかしブリッジは止まらない。リノアも負けじと、

喉奥でデカチンを締め付けながら吸い続けるが、ブリッジは耐えた。

「ふふふ、ブリッジのクンニ、上手だから💖」

ケイトリンが得意げに笑う。

「次は指責め対決にしようよ」

ブリッジは起き上がると余裕そうに言った。

「くっ！次は負けないわ！」

二人は体を密着させると、お互いの性器を指で弄り始めた。

「はあっ💖ブリッジの指、きもちいいん💖あっダメ

え💖いきなり2本も・あんっ💖！」

ブリッジの細くて長い指がリノアのマンコを掻き回し、Gスポットを的確に刺激する。リノアの巨乳が揺れ、汗が飛び散る。しかし、彼女も負けてはいない。人差し指と親指で指輪つかを作ると、ブリッジのカリ首にそれを引っ掛けると、ゆっくりとしごきながら、亀頭をもう一方の手の平でこね回した。ブリッジの腹筋がピクピク痙攣する。

「あ、それ！気持ちいいよお❤️」

ブリッジは舌を出して呆けた表情で悶えた。

（効いてる！リノアの指輪っかはメチャクチャ気持ちいいからな！流石のデカチンもお陀仏だ！）

俺はそう思いながら、ビクビクと痙攣し、大きく膨らんでいくブリッジの亀頭を眺めた。

「効くでしょ？私の指輪っか！ほら、高速で行くわよ！イツちゃいなさい！」リノアはそう言うと、指輪っかを激しく上下させた。

（すご！指輪っかで握り切れない！亀頭デッカ！）
内心、ブリッジのデカ亀頭に興奮するリノア。

「おわわ！早い！早くいいい❤️」

舌を出してのけ反るブリッジ。

相当に効いているようだ。すでにリノアのオマンコを責める指も止まっている。

「ほらほらほらく❤️イケ！イケイケイケえ❤️」

「あ！イクイクイク！・・・なあゝんてね♪」

ブリッジは余裕の笑みでリノアを見つめた。

「え？あえ？」とリノア。

「あははは！そんな手コキじゃ、ボクのチンポは満足できないって！今度も、ボクの勝ちかな♪」

「え？ちよつと待つ・・・！」

「ぬっぷう💖」リノアのオマンコにより深くブリッジの指が挿入される。

「あ！そこ・・・💖！」

いきなりGスポットを直撃させるブリッジ。

「へへ♪さつき指を入れた時に、もう見極めたからね♪ここだろ？おらおらあ💖」

「くちゅ💖くちゅ💖くちゅ💖くちゅ💖くちゅ💖・・・」

湿り気を帯びた弄り音が響く。

「おひひくん💖ダメエ💖ダメダメえ💖・・・ダメいいいいいい💖」

今度はレノアが、舌を出してのけ反る番だ。

太ももをガクガクと震わせ、マン汁をオマンコからビチュビチュと吹き出すレノア。

「オラオラオラあ💖どうだあ〜？」

邪な笑みを浮かべるブリッジ。

中指と薬指を、すでにグチヨグチヨに濡れそぼった
膣口にずぶずぶと沈めていくブリッジ。

「んああっ♡指・・・くるう♡入ってるう♡ブリッ
ジの指、熱い♡」指が第二関節まで飲み込まれる
と、ブリッジはゆっくりと指を曲げ、よりの確にG
スポットを捉えた。そして、激しく、しかしリズム
カルに掻き回し始めた。

「ぐちゅ♡ぐちゅぐちゅ♡じゅぽじゅぽ♡」
卑猥な水音が遺跡の静寂を切り裂く。

リノアのマンコは指に吸い付くように締め付け、内
部の襞が一本一本めくれ上がる感触が、ブリッジの
指先に伝わってくるのが俺にもわかるほどだった。

「はあっ♡上手う♡手マン・・・あっ♡、あっ♡、あ
ひいっ♡！そこっ♡ダメっ♡イツちゃう♡！」

ブリッジが指のピストンを加速させる。
中指と薬指を高速で出し入れしながら、親指でクリ
トリスをコリコリと執拗に擦り上げる。

リノアの太ももがビクビクツと痙攣し始め、膝が内側に寄っては開きを繰り返す。

「あははは♪ほら、見ろよ、お兄さん❤️リノアのマスコが、ボクの指でどうなってるか❤️」

ブリッジが指をさらに深く沈め、Gスポットをぐりぐりと抉るように刺激する。

（こいつ！ 俺よりもはるかに手マンが上手い！）

俺はブリッジの手マンを凝視していた。ブリッジはリノアを背後から抱きかかえるようにして、片手で彼女の細い腰を固定し、もう片方の手を大胆に股間に滑り込ませていた。彼女の丸見えのオマンコはブリッジの指が動いたたび、グチュ❤️グチュグチュ❤️という、ドエロい湿り気を帯びた音を奏で、それが遺跡の石壁に反響した。最初は控えめだった音が、指の動きが加速するにつれてどんどん大きくなり、まるで水をかき回すような卑猥な水音に変わっていく。

「んっ❤️あっ、待って・・・そこ、ダメっ❤️！」